

思い出、雑感、エピソード

- 巖冬期の奥又白山行…………… 小原 武
思い出の山行…………… 寺田雅治
山岳部時代の思い出…………… 川崎 誠
鹿島槍ヶ岳北壁敗退の記…………… 出島五郎
前穂高東面岩登り（奥又白）合宿…………… 池田直弥
冬山の教訓「道に迷ったら引き返せ」…………… 柴田武明
新人合宿の思い出…………… 川治晴彦
山とりんごに憧れて…………… 板谷真人
仙丈岳西面の思い出…………… 平 邦彦
上高地小梨平サマーテントの思い出…………… 松尾武久
秋山強化合宿の思い出…………… 駒井 浩
昭和 39（1964）年度を振り返って
…………… 故 小川 勝、宮崎敏孝、西阪 孚
山岳部時代の懐かしい思い出…………… 中邨康文
報告 No.2 にかけた思い…………… 岡村知彦
あの夏の思い出…………… 武藤一郎
思い出のアンナプルナⅡ峰南壁…………… 三井和夫
山岳会の思い出…………… 高橋雄治
残雪期鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁北稜、北壁主稜連続登攀の記録
…………… 吉田秀樹
昭和 52 年春山個人山行（積雪期黒部源流）…………… 師田信人
伊那松本山岳部時代の思い出…………… 田中誠司
「信大伊那松本山岳部」と「乗鞍ヒュッテ」
…………… 岡崎 猛、三和子

厳冬期の奥又白山行 — 「氷壁」の舞台を体験したくて—

昭和 31 年入部 文理学部社会科学科 小原 武

昭和 31 年入学の 5 月（この時点小生山岳部未入部）ご存知の二重遭難事故で文理山岳部としての活動が思うにまかせず、入部後の夏山合宿後立山、唐松から槍・上高地迄の縦走の参加者は新入りの小生を含め 7 名（内 1 名部外者）であった。

前年より計画されていた医・文理合同になる松本山岳部の会則が起草されたのがこの年でこれから 4 年間様々な仲間達との出会い、山旅を楽しんだ学生生活であった。

井上靖の新聞連載小説「氷壁」が完結、映画化されたのが 32 年だったと思うが、その影響で、33 年の新入部員は思いのほか多数で、戦後第一次登山ブームと云われた。

32 年夏上高地サマ天のテントキーパーの際、河童橋たもとで津川雅彦と野添ひとみのコンビの映画ロケがあったのを脇で見物したものだが、現在の上高地が中高年主体の登山者とは違い、圧倒的に若者中心の登山者のグループであった。

4 年間の学生生活で一度は厳冬期の前穂高の壁を経験しておきたいとの思いが増したのは、今から思えば小説「氷壁」にあったかも知れない。

昭和 34 年 1 月、3 月に卒業を控えた窪田文夫先輩、小林喜芳先輩を口説いて、岩本、片岡、小原の 5 名で、新村橋から少し奥又よりの樹林帯に BC を設け、天候を窺いつつ凡そ一週間そこらあたりをぶらぶらして、結局天候に恵まれず松本に引き返して終わった。

この山行では、今思い返せば誠に荒唐無稽と言おうか、面白い試みを真剣に考えて実行したものだ。部室の塵の中から古びた単板のスキー板を見つけ出し、横板を釘打ちして渡し、参加者 5 人分のザックを乗せる様に細工、沢渡でバスを降りてからザックをソリに乗せ、雪道を前後に分かれて押したり紐で引っばったりして、徳沢まで行く計画で出発したものであるが、背負って歩くより時間は掛かるし、起動トルクが積もった雪の抵抗の為相当の HP がないと起動しないし、結局大正池手前でソリが分解してしまい、ソリを登山に活用するなら骨太のガッシリした橋台のソリで、馬一頭欲しいとの結論に達した次第であった。



●宝の木から前穂高東壁 4 峰正面

翌年度、即ち昭和34年12月、今度は小生が翌年3月卒業の年である。12月に入って卒業論文をまがりなりにも書き上げ、表紙の題名、氏名を習字の上手い多治見の後輩若尾良君（部外者）が寮に居残っていたのを、これ幸いと見つけ、表紙作成と教務課への提出を託して、21日～正月に掛けて入山。前年と同じ処にサポートテントを設営した。サポート隊数名は、蝶、霞沢岳へのピストン山行の後下山予定で、我々奥又白行き4名（小林喜芳リーダー以下小原、伊藤国啓、山田和彦）とはサポートテント設営後は別動の計画に依る合宿であった。

*その他サポート隊を含め参加者名は一般報告1959年度（昭和34年度）に詳細有り。

連日の雪降りサポート隊共々3日位沈殿した後、我々は奥又白宝ノ木を目指した。

これに遡る11月雪が来る前に福田敏男、伊藤国啓両君がズクを出して米、石油2缶を宝ノ木根元にデポして来たので、その分荷が軽くなったが、松高ルンゼの雪崩発生を避け、松高尾根を攀じ登り、最終のトラヴァースをいっきに渡り、宝ノ木に到達、その脇にテントを張った。

前回と違い天候はまずまずで、アタックを決めた前夜は星空、19時には就寝、翌2時起床、2時間かけて雪を溶かして雑煮を作り朝食、4時テントを出発。本谷を詰めて北壁の基部に取り付いたのは9時頃であったか、今となっては記憶も不確かであるが、メモをとっておけば誠に貴重なものになっていたであろう。

北壁に取り付いた時点で雪が舞い始め、スタンスにする岩の割れ目に積もった雪があると、アイゼンの爪をそこに乗せる時どうしても不安に感じ、雪を払いのけたくなり、払いのけるのに手袋を通して指先が痛く手袋がみるみるうちに凍りついてしまう。そこで小林さんが携帯した便所掃除に使うあの柄のついた亀の子束子が威力を発揮した。松本出発時ピッケルと共に妙な物をタッシュェに差し込んでいるので、何の為かと訝っていたのだが、北壁に取り付いて漸くその答えを得た思いであった。

冬の北壁は、想像以上にショッパク、殊に人よりバランスの悪い小生にとって、キンタマフリクションを効かせた制動は云うに及ばず、全身の衣服でブレーキを効かせてへばりつく様にして攀じ登らなければならず、思わず六つ目のホールドとして前歯を使って岩に噛み付きたくなる衝動に駆られた。ひょっとして一瞬、岩に歯を当てたかもしれない。

軍手をもっと沢山持ってくればよかったと思うのだが今となってはもう遅い。散々しごかれたが、それでも今風で云うなら想定範囲内、14時頃Aフェース直下第2テラスに到達した。雪洞を掘ってビヴァーク態勢を整え、4人それぞれ岩にハーケンを打ち込んでカラビナにザイルを通しセルフビレーの工作をして、雪洞に入って就寝することにした。翌朝のAフェースアタックに備えたが、天候は下り気味、食糧



●又白池のBCで（左から山田・小林・小原）

は3日分あり、2日の沈殿は許されるのでここでチャンスを待った。結局3日間天候の回復が無く4日目、食糧残とズクを無くしてV字谷に逃げてそこからピークへとも考えたが、気力喪失、結局V字谷を降り、踏み変え点から奥又白へ帰還した。

今から思うに、その当時の我々が、天候のコンディションを上回る様な心身共に力量を持ち合わせが無かったと云う事だ。下山後話し合ったものだが、次回のチャンスには携帯必需品として、柄付き亀の子束子、軍手新品出来るだけ沢山（使い捨てにして岩を登る為）持って行こう、と。

厳冬期の前穂のピークに立つ事は出来なかったが北壁を果たし「満足も中位なりおらが冬」との感の山行であった。6月 7月 9月 10月の又白池周辺の合宿を繰り返し、冬の又白を何としても体験したかったものだから、これが小生の在学4年間の集大成と云えまいか。

その後、便所掃除の道具を使う様な山行に恵まれずに現在に至っている。

この山行には、ファンタジックな後日談がある。

山から下りて2月になって小林喜芳さんと、この第2テラスのビヴァークのことに話題にした折、小生が4人のほかもう一人居た様な気がしてならないと云うと、コバさんも「俺も4人ではなくもう一人居たように思うが誰だろう。誰だろうか、寝ていてグイグイ俺の体を押す、身体がでかく、ガッシリした奴だった様に思えるのだが、そんなはずないよな、ひょっとして平沢さんかな」いやはや、おかしな話になった。

「いやいや、僕は夜中に横に寝ていた格さんが間違いなく腰のカラビナをはずして外へ小便をしに出掛けた記憶があるが、そんなことはないですよえ」

こんなやりとりをし、その後も時が経過するにつれ、再会の折り幾度となく5人目の一人について話題にした事があった。

コバさんにしてみれば、小生入学前年秋、ご存知のAフェース滑落遭難の平沢さんは長岡高校の先輩で、平沢さんの勧めで信大山岳部に入った経緯と、遭難時の合宿メンバーの一人でもあったそうで、この第2テラスでのビヴァークは格別の脳内生理が働いても不思議ではない様に思える。

では、小生の片岡格さんの小便はどの様に解釈すればよいのか。片岡格さんに生前東京在勤時（富士山滑落遭難の少し前）話題にしたことがあったが、「小原さん、前年の山行とゴッチャになっているんじゃないの」と云っていたが、年を経るにつれ益々5人目が居た様に思えて来る。

思えば、民俗学が扱うテーマであろうが、人の世の伝承、物語もこの様にして当事者以外の人に口から口へ伝承される中で、新しい物語が生まれて行くのではなからうか。

それだけ、山、自然の神秘は我々山仲間の心の繋がりを深め、苦樂を共にしたことをベースにして、永続するものである様に思う。

さてさて、この同行者のうちから、上記の小生の記憶の不備を正そうとしても、思い出を語り合おうとしても、小林喜芳さん、伊藤国啓さん、今は鬼籍。山田和彦さん一人になってしまった。

嗚呼 寂寥 古い顔

(2006年6月1日記)

思い出の山行

昭和 35 年入部 農学部林学科 寺田 雅 治

私が特別奨学金の一時金の交付を受け、初めてスキー道具一式が自分の物となった時、思誠寮で同室だった後藤先輩に一番にその喜びを報告しました。

暫くたって後藤先輩から冬山合宿が終わってから、岩本先輩と一緒に乗鞍でスキーの個人合宿をしようという計画を話して頂き、飛び上がる程の喜びだった事を思い出します。

当時の乗鞍の鈴蘭付近は、今のように旅館やヒュッテも無く（信大のヒュッテも未だ出来ていなかった）一面広い雪原であり、丁度今のスカイラブコースのあたりに一基、一人掛けのリフトがあっただけのスキー場で殆ど人影も無い状態でした。

山岳部の大型ミードテントやスキー道具、山道具一式を担ぎ、岩本先輩、後藤先輩と私の3人で雪原にテントを設営し、約一週間程先輩2人にスキーの指導をしてもらった事が未だに私の脳裏に強烈な印象として残っています。

夜は石油も充分でなかったので、暖房のために岩本先輩の指導で3人とも大声で歌ばかり歌い、その歌も少々下品な数え歌や、軽い猿歌等で私はちょっぴり大人になった様な気がしたものです。

スキーの方はあまり上達しませんでした。ある一日、天候の良い日を狙って乗鞍岳頂上アタックを行いました。

位ヶ原上部でスキーをデポし、ワカンとアイゼンで頂上を目指しましたが、肩の小屋辺りから猛烈な吹雪となり、もう少しで頂上という所で、岩本先輩よりここで引き返す事にするとの決断が出て、残念ながら断念して戻りました。

この経験は私には初めての事であり、極寒の中でむしろ感動を覚えたことを記憶しております。

その年の春の合宿で、これ程慎重だった岩本先輩が逝去された事を思うと、未だに悲しみがこみ上げてきます。

さてスキーをデポした場所からは、スキーで位ヶ原を滑降する事になり、私が最初に斜滑降を開始した



●鈴蘭から見た乗鞍岳

とたん転倒してしまい、そのまま斜面をスキーでなくお尻と体で位ヶ原の底まで滑ってしまいました。幸い怪我も無く一番早く下にたどり着き、先輩2人に笑われた事を懐かしく思い出されます。

毎年スキーシーズンにはフレンズ岡崎でお世話になり、乗鞍スキー場でスキーを楽しんでおりますが、いつも美しい乗鞍岳を見ると、岩本先輩、後藤先輩のことを思い出します。

後藤先輩お元気でお過ごしですか、是非お出合いいたしたく思っております。

山岳部時代の思い出

昭和 35 年入部 農学部林学科 川崎 誠

私は 1960 年に入学して山岳部に入部しようと思いましたが、ピッケルで横っ面を殴られるぞなどと脅かされて躊躇して入部したのは 7 月だった。

その年は入部者が多く松本では農 10 人、工 2 人、医 2 人、文理 1 人だったと思う。

それに比べて上級生で実際に活動している人は医、文理合わせて 4～5 人くらいだった。

その後数年はかなりの数の入部者がいたので松本の上級生は毎年新人訓練ばかりで自分の山行を出来ないという不満があり、農学部はお断りだなどとも言われた。そんなことで'62 年の伊那松本山岳部統合へと発展していった。

人数が多いだけでなく個性豊かな人材が豊富だった。思誠寮の一角は山岳部長屋と呼ばれ、落第生の退部者や部外者でポッカや山小屋のアルバイトをしている人たちも含めて雑然として、汚く暖かく心休まるような独特の雰囲気があった。そんな雰囲気に合わせようと東京のお坊ちゃんだった私はことさらに汚くするのに苦労した。

当時の活動は今考えると系統的なトレーニングや工夫、努力が欠けていたように思う。用具では幅の広いキスリングザックは荷重が肩だけにかかるし、アイゼンは布テープで手袋を外して結ぶのが一苦労だった。改良を考えましたが、現にあるものを使いこなすことに力を注いだ。行動中はなるべく水を飲むな、飲むとばてるぞと言われて信じこんでいた。今でこそ水を飲めといわれているが、水我慢の習性は一生抜けないでしょう。

山へ行っては汗かき、冷え性、寝つきの悪さやバランスの悪さでいつも苦労した。特に苦しかった山行は次の 2 件である。

'62 年 3 月 (2 年生) 春の合宿で中央アルプス池山尾根から空木岳～木曾駒のポーラー山行の際に吐血した。画鋏でも飲み込んだのではないかと思うくらい腹部の激痛が 2 晩以上も続いた。仲間に抱えられるようにしてやっとの思いで下山して駒ヶ根の病院へ着いたときは助かったと思った。暴飲暴食による慢性胃炎が原因だった。

'62 年 7 月 (3 年生) の夏山合宿 林学科 3 年生は夏休みに実習があり合宿に参加できない。私は落第と思っていたので実習より山行を選んだ。その年は人数が多かったので剣沢と涸沢の 2 班にわけて定着合宿の後に縦走に出るという大規模なものだった。剣沢は 15 人くらいだったのだろうか、私はチーフリーダーで剣岳は初めてだったので計画、準備の段階でへとへとになり入山の時はもう終わったような気持ちだった。

当時は道路が奥まで行ってなかったので真砂沢出合のテントサイトまで 2 日かかった。入山後はとにかく

く事故を起こさないで無事終わることばかり考えて非常に緊張した。1週間の定着の後にざら峠、針ノ木を経て白馬大池から下山した時は安堵感と達成感に満たされた。

40年以上も前の仲間といまだに交友を保っていたり、最近また退部者とも交友が再開したり心豊かに過ごせるのは山岳部のおかげと感謝しております。



● 36年冬山 前アルプス縦走隊
小谷・西郡・川崎・葛西

鹿島槍ヶ岳北壁敗退の記

昭和35年入部 農学部林学科 出島五郎

天候の不安と陰惨な圧倒的スケールの北壁に威圧されてしまった。完敗である。天候を選び、じっくり腰を落ち着けて、対処しなければこの壁は入っていけないところである。

昭和37年（1962年）10月17日から21日

メンバー 出島五郎、石井一哉、池田直弥、川崎 誠

10月17日 (晴) 入山 神城-遠見-テントサイト

18日 (快晴) 遠見-大遠見-五竜小屋

19日 (快晴-曇り、ガス視界悪し)

3:00 起床 (気圧の谷が近づいているのに全天星空)

5:15 出発、カクネ里へ。

11:15 キレット尾根の末端でルート偵察、圧倒的な北壁に威圧される。

12:50 ルート決定。

洞窟尾根-池田直弥、川崎誠

主稜-出島五郎、石井一哉

奥の沢への万年雪は、叩きつけてやっとなツアッケが半分食い込む位。

ドンドン傾斜してくる。カクネ里はすでに半分を日陰にして、もう夕暮れが迫って来たような錯覚を覚える。

13:15 主稜末端、新雪は日陰に少し、シュルントを越えて、行く手10mのアイスフォールは左岸の尾根を高巻き。

14:10 昼食の後、さらに登って取り付きへ。

14:30 アンザイレン、登攀開始。

雪と岩と草つきの急な尾根を尺取りで、5ピッチ登る。

16:30 ビパークサイトへ到着 (池田隊は取り付きでビパーク)

夜中、気温ゆるみ、すぐ横の箱型岸壁から絶え間なく落石。谷中に響き渡る。

20日 (雨、上部はガスで視界ゼロ)

雪解け激しく、壁中しずくの中に煙る。

6:00 食事中、ついに雨が降り出す。池田隊とコールし合い、撤退を決める。



●遠見尾根からカクネ里遠望
写真：坂本 OB 提供 (左より坂本・茅野・金松)

- 7:30 アップザイレンを開始、下降をはじめめる。
- 9:00 主稜取り付き。
- 9:30 洞窟尾根取り付き。池田隊と合流。彼等の沸かしてくれたお湯に生き返る。ピンチフードを食べる。
- 10:40 洞窟尾根の下部を下る。雪付き、草付きで不安定この上なし。
- 11:30 雪溪にでる。
- 12:50 二股。雨本格的になってくる。
ようやく五竜小屋に到着。
- 21日 (小雪-晴れ-雪)
- 10:00 小屋出発、新雪 15cm
- 11:20 大遠見
- 12:20 小遠見、霧氷
- 13:10 遠見小屋、積雪はここまで。
- 15:30 築場スキー場

前穂高東面岩登り (奥又白) 合宿

—我が大学時代の真珠—

昭和 35 年入部 農学部畜産学科 池田直弥

64 歳になった今、自分の山登りを振り返ってみると、大学(青春)時代しかなかった山登りがあります。それは「岩登り」です。

そのゲレンデとして奥又白合宿が毎年夏山縦走合宿後に一週間程ありました。通常の合宿と違い、同合宿では使用する岩登り用具をどっさり追加して、いつもより重い (50 - 60Kg) キスリングザックを背負い各自のペースで、松高ルンゼをヒィヒィ登り、隊を組むことなくバラバラになり、奥又白池畔のテントサイトを目指したものでした。夏山縦走の疲れも抜けない状態で参加するため、あまりのつらさにザックを背負ったまま木の根元に腰掛け、そのまま眠ってしまった時もありました。いつも、やっとなのおもいで奥又白池畔のテントサイトに着いたものです。

しかし、そこは桃源郷の世界でした。

モルゲンロート (朝焼け) で真っ赤に染まった前穂高東壁を眺めながら一日が始まり、清々しいピリッとした空気の中で朝食をとり、サブザックに今日登るルートで使用する岩登り用具と昼食を詰めて、2~3名のパーティ毎にテントを出発する。時には、命がけで岩をよじ登り、前穂高頂上付近の人気のない所で奥又白池を眼下に見ながら昼食をとり、時には生きていることの実感を味わわされ、食後のひと時を過ごしました。

A 沢をグリセードでいっきに降り、心と膝を笑わせて、テントに着いた (14 時前後に) 後も、テントサイトで夕食の準備をする (17 時頃) まで、またひと時、のんびりと今日登った前穂高東面の岸壁を眺めながら過ごします。他のパーティが帰還するまで、緊張感から開放されて、日向ぼっこをして過ごすテントサイトでの午後のひと時。緊張とリラックスのある岩登り合宿の 1 週間、まさに桃源郷生活でした。



●懐かしい—奥又白池

この合宿では、初級者は第一尾根や北尾根の岩尾根登りから始まり、中級になると C、B、A フェース、北壁を楽しみ、四峰の各ルート（明大ルート、甲南ルート、松高ルート等）にはリーダーから指名された上級者のみ挑むという部員の力量に合った岩登り合宿でした。D フェース、右岩稜はルートの開発途上で墜落事故やザイルぶら下がり事故が発生しておりました。

そんな中、1962年の夏（奥又白）合宿で、リーダーの山田さんの指名を受け山田さんと右岩稜へ挑みました。トップの山田さんがルートを切開き、私はカラビナ・ハーケン・アプミ等の岩登り用具を回収しながらラストとして身重（弁慶状態）になりながら、時には山田さんにザイルで引っ張ってもらって、完登した思い出が真珠と化した奥又白合宿の核（中心）となって心に定着しています。

山への情熱と多感な感受性に満ちていた大学（青春）時代だからこそ、ザイルパートナーを信頼しお互いに命をかけて挑んだ明るい前穂高東面の岩登り。大学卒業後、社会人になってから同じような環境になることはなく、そのため岩登りをやろうと言う気持ちも出ませんでした。まさに、我が大学時代の山登りの真珠と化した前穂高東面岩登り（奥又白）合宿でした。

純粋な山登りに没頭していた大学（青春）時代に感銘した言葉は次のもので、

山に祈る 尾崎喜八

流転の世界
 必滅の人生に
 成敗はともあれ
 人が傾けて
 悔いることなき
 その純粋な
 愛と意欲の美しさ

64歳の現在、感銘している言葉は次のものです。

山は日本人の魂の故郷であり

生命の根源である。
人は山を慕い、山に憧れ、
その靈魂を山に託したいと考える。

戸川安章著「出羽三山 -歴史と文化-」より

冬山の教訓「道に迷ったら引き返せ」

昭和36年入部 農学部畜産学科 柴田武明

山に登って感動した事、楽しかった事、つらい事、等色々あった。しかし多くの山友達に出会い、一緒に釜の飯を喰らい、又酒を飲み交わし、貧乏ながらも一番楽しい青春時代を謳歌していた時で、一生で一番思い出を持った時であった。

ところで、信州大学に入った時、最初から山岳部に入る予定ではなかった。高校から山岳部に所属していた身で、かなり危険なことをやっていた関係より、大学になれば更に危険に曝される事を案じ、又、新聞に大学山岳部の遭難のニュースが多く出た時でもあり、母より大学での山岳部は止めるように言われていた。しかし入学後、思誠寮の入寮面接を受けた時、山岳部の大先輩で寮長をしていた小林実先輩の面接を受け「高校の時に山岳部に所属しているなら、山岳部へ入れ。さすれば即入寮可である」との事で入部する意向を出してしまった。そして入寮した部屋が、南寮一号室で、かの有名な小林喜芳さんの部屋でした。これでは入部せざるをえないと覚悟し、入部することにした次第です。母は「8年生ですか」と驚き、兄は「文理学部で長髪をなびかせテニスが非常に強い人がいた。全学部に知れ渡っていた人で、その人が小林喜芳さんか」と言っていました。

喜芳さんは、天ぷら屋のバイトをしていた。むしろ天ぷら屋の主人であると言ったほうがよかった。よっぽど気に入ったのか、最後の閉店まで居る関係か、住み込みで楽しむようになり、ほとんど寮の部屋に帰ることはなかった。たまに寮に来ると、それは決まって風呂のある時だけと思うが、4時と決められた入浴時間の前に入り、素っ裸で寮歌や学生歌を歌いながら寮の廊下を闊歩してくる。風呂からは一番遠い所に部屋があるのだが気負いなく、その姿にただただ驚いていた。それも、自分の部屋に入るのではなく隣の部屋に入るのだ（隣は空き部屋であった）、そして鍵をかけてしまう。今思えばその時は彼女が来ていたような気がする。自分も気を利かし、他の部屋かマージャン部屋へと行く次第であった。

小林実先輩の尽力や小林喜芳大先輩のことで、山岳部に入る事を母に話し承知してもらったが、岩登りは駄目と言われました。仕方なく、1年生の時は自重し、岩山には参加しませんでした。2年目になり、小梨平でのサマーテントに母が親しい友人と来る事になり、気さくな山岳部の人達による上高地周辺や明神池の案内で、非常にご満悦となり、以後特に注文をつけることは無くなり、「気をつけてくれよ」と話すだけでした。そして年の3分の1を山に入っている事にもなった。

ところで山岳部で思い出すのは、厳しい状況下での事が主で、ただただ重いザックを背負い足元だけを見ていたような気がする。たまにこれから行く縦走路の幾重にも重なった峰々の彼方を見やり、これからそこに行くんだなと思い馳せていたが、山道に咲いている可憐な花を愛でる事は少なかった。特に記憶に

残っているのは厳しい冬山や岩壁である。冬山、それは一步間違えれば死に至る世界でもあった。

その思い出の中で特に記憶に残るのは、1年の冬山、前アルプス全山縦走である。その冬は寒さが厳しく、縦走隊も凍傷にあい大変だったと聞きました。自分は唐沢岳サポート隊で、高瀬川より入り、東沢でテント一泊し、東沢の途中から唐沢岳へとルートを取った。途中の沢から唐沢岳への尾根に登り、稜線上に沿い道なき道を進み、唐沢岳から餓鬼岳へと行き、餓鬼小屋で泊まる。雪と風が厳しく翌日は沈殿したと思うが？ いや何日もか？ しかし燕サポート隊との合流の関係もあるので、いつまでも沈殿するわけにゆかない。翌々日東沢乗越しまで縦走隊を送り、次の日に餓鬼小屋を引き上げた。

寒さで全てのものは凍り付き、オーバーシューズはガリガリ、テントは3倍にも膨れていた。そして登ってきたトレースは風と雪で吹き消され、ポールと木に着けた標識のみが道標であった。尾根筋から森林帯への降口は間違いやすく、特に直角に曲がる場所の場合はなお更だ。だから木に赤い布の標識をつけて行く。その赤い布を横目で見ながら森林帯と森林帯の間のやや広い雪原を降りていった。しばらく降りてから、登って来た所と違うと感じた。標識がない。確かこの辺で直角に曲がったはず、変と思いながらもう少しと降りてしまった。リーダーの小林隊長が「止まれ」と号令をだした。さあどうするか。餓鬼岳撤収で凍りついた荷物のパッキングに時間がかかり、出発が遅くなったので、今は陽も陰ってしまった。かなり降りてしまったので、今降りて来た坂を引き返すのは辛い。そして登るには雪が柔らかく踏ん張りが利かない状況だ。標識の所を間違いなく降りて来た。次の標識が風で吹き飛ばされ標識が無くなり、曲がる所が判からなかったのではないか。だから右前方に見える向こうの尾根に道があるはず、トラバースした方が楽で早い、と自分は主張した。ここでテントを張ろうなど、皆色々な意見を出した。小林隊長はしばらく考えていたが、「今降りてきた道を標識が分かる所まで引き返す」と命を下した。なんで?! 前方に登って来た尾根が見えているではないか!? 隊長の判断に不服を言いながら引き返した。約20分位掛かったと思う。ようやく標識の所まで引き返した。よく見渡すと、なんと標識の直角90度曲がった森林帯の中に次の標識があるではないか。それもザックがかろうじて通る位の狭い林間に、だから見落としてしまっ



● 餓鬼岳サポート隊と縦走隊 雪の戯れ

たのだ。雪原を登ってきたのではなく、森林帯の中を縫って登って来た出口で、そこで90度ルートが曲がっていた。注意していたはずだが、急いで降りていた為、見落としてしまったのだ。なぜ気がつかなかったのだ。ようやく正規ルートに従い樹林帯の中を降りて行くと尾根は曲がって別の方に行っていた。さっき自分が主張していた尾根は別の尾根であった。もしトラバースしていたら道を発見できず、完全に迷ってしまったに違いない。そしたら遭難も?? それを思うと背筋が寒くなってきた。なんと浅はかな考えをしたものだ。その時の判断は間違いないと確信を持っていたのに、なぜ判断間違いしたのか? 人間は時として判断に誤りがあるものだ。しかし冬山での判断の誤りは死に至る。決して誤りで済まされるものではない。「道に迷ったら引き返せ」と言う諺を知ってはいたが実践できなかった。古人の諺に間違いは無い、大切な教えだと肝に銘じた。樹林帯に入ると登ってきたトレースが残っており、又標識もよく目につき、スムーズに降りることが出来た。間違えていたら雪原の中でもがいていたに違いない。

この経験は自分に幾つもの教えとなった。自信過剰になってはいけない、無理をしてはいけない、偉大な自然を相手に常に謙虚でなければならない。岩登りで岩のスタンスに足をかけ体重を掛ける時、無理な力が岩に掛からない様に恐る恐るかけ、何も無いでいろよと言いきかせていた。アプミに乗る時も同じである。歩くときは静かに歩かないといけない。山の女神を怒らせてはいけないのだ。山では全てに慎重に、引き返すことを恐れてはいけない。

そして「道に迷ったら引き返せ」、この格言はすべてに通じる事である。山道に迷った時だけでなく、社会に出ても同じことが言える。山の道は社会の道につながる。会社で業績が行き詰まった時、クレームの原因が判らなくなった時、故障の原因が判らなくなった時など、対策や解決方法で常に言われている「原点に返れ」が「道に迷ったら引き返せ」と同じ意味である。途中で色々小細工すると、完全に迷路に入り、どうしてよいやら判らなくなり、なすこと全て裏目裏目となり、なす術が無くなる。

前アルプス全山縦走の唐沢サポートで経験したこと、それは「道に迷ったら引き返せ」である。それ以後山行に当たっての心掛けとして、常に心の中で自分に言い聞かせていた。これは家庭でも会社でも社会でも共通する事で、自分にとって非常に大切な教訓となった。

新人合宿の思い出

昭和36年入部 農学部農学科 川治晴彦

平成17年度のOB総会で山岳部部員の激減により山岳部が存亡の危機にあると報告された。私が在部していた昭和30年代後半は、若者が夢中になれることが少なかったわけでは決してなかったが、信州が自然、日本アルプス(山岳活動)、素朴(ひなびた)等の代名詞のようで、信州大学を選んだ理由に“山が好きだから”という仲間が多かった。当然、山岳部も非常に人気のある部活であったが個人や仲間同士でザックを担いで山に出かけている学生は実に多かった。せつかく信州を求めてきた若人の山離れ、自然離れは非常に残念なことですね!

昭和36年4月は入学の年であり、山岳部においても大きな事故のあった残念な年です。

山登り(大きなキスリングを担いだ)の経験のない私が、常念岳や美ヶ原に行ってみたいという思いから山岳部活動の厳しさも怖さも緊張もなく入部を決めた。

新学期の事故で新人合宿の取り止めも検討されたようだが、先輩諸氏の尽力で多くの先輩も参加されて実施された。合宿準備は緊張と興奮であまり記憶していないが、県の森の体育館に一人当たりに分けられ、ずらり並べられた共通装備をキスリングに個人装備を極端に減らして30数キロ！ 嗚呼、重い！

朝もやの県の森を出発、長い長いキャラバン（隊列のほとんどの人は初対面）。静々と松本警察を過ぎ松本電鉄の階段を登るころには、ゼイゼイ息が上がりかけていたね。鳥々から岩魚留めまでは、五万分の一の地図で頭に入っていた。後何キロと後何分でイッポンを励みに。

ぼつぼつ新生にバテがではじめた。徳本峠の手前の急なジクザクの登りでわたしも涙ながらにダウン。後に付いてくださった3年部員（体は小さいが強靱な肉体の持ち主）が「高村光太郎著『智恵子抄』を知ってますか？」光太郎は何か！ 智恵子知らない！ 「病弱の智恵子は光太郎とここを登ったんだ！」情けないことにそんな励ましもむなしく、ついにまたダウン。助けていただいた。徳本峠から見た雪の付いた明神岳。ああ来てよかった！

新村橋が壊れていて、雪解け水が逆巻く梓川を胸まで浸かりながら渡渉して横尾のポッカ小屋で“沈”。東京まで行って買った靴もキスリングもビチョビチョ。

上級生部員の冷静沈着な指示、判断感心したね。おれ、うろうろほとんど一人の世界。涸沢の雪上訓練のあと、5・6のゴルカザイテンから眺めた東京の大学山岳部のシゴキ訓練の実態。恐ろしかったよ。

蝶ヶ岳の稜線から見た屏風、涸沢、穂高のパノラマ。苦しくて泣けたけど、付いて来てよかった。よくぞ、引張ってなだめて登らせて、上級生と同じ景色を体験をさせてくれました。ありがたかったですね。

30人を越す新生を上級生のマンツーマンの暖い指導が、華奢で体力的にも経験的にも未熟であった私にとって恐怖感を感じさせなかったのが、初めての冒険に成功することができました。

合宿も無事に終了し、上高地のバス停に着いた頃には新入部員の間にも仲間意識が生まれ、夏山シーズンを前にしていろいろ山行計画が話題になっていたことを思い出します。

在学中も40年以上たった今も同級生や先輩、後輩の皆様と仲良くお付き合いできているのも、山岳部の「分け隔てのない仲間意識と皆で協力し合って目的達成し、皆で喜び合おう」とするカラーにあるのじゃないかな。

信州の地を訪れた若人は、勇気を持って、ひるむことなく自然のフィールドを満喫するよい機会にめぐり逢えたと思い起こして、山へ行こう。山岳部は最高だね！



●昭和36年冬山を終えて文理学部の校庭で



●昭和36年度新人合宿屏風の頭にて

山とりんごに憧れて

昭和 36 年入部 農学部林学科 板谷 真人

山とりんごに憧れてやって来た信州。入部当時の色々なことがその後の小生の人生に少なからず影響を与えたと思えます。印象に残っているそれぞれの事柄を思い出してみたい。

- ・鉄瓶、お釜

合宿の飯炊きは大きな鑊の付いた釜(厚板の蓋付き)使用、又お茶は鉄瓶(鋳物製の大きなもの)を使った。これらを背負わされたものはパッキングに大苦勞。荷物のバランスが悪く、早くバテる事が多かった。

- ・薪集め

手当たり次第に薪を集めたが、その中にナナカマドが混じっていて薪にならぬと捨てられた。

- ・生野菜

縦走中の食料計画に生野菜(トマト・キュウリ等)が入っていて保存の為の竹かごを作った。長い縦走中の生野菜は特別に美味かった。

- ・野口五郎岳の石

野口五郎岳のカールで友人(田中正治)が短冊状の石を拾って自分のザックに入れて歩いた。そのせいかどうかバテることがしばしばで我々は助かった。その石は今も彼の家に大切にしまっているらしい。

- ・ジャンケン

荷物を背負うのも食べ物の分配もジャンケンで決まったのでそれは真剣な勝負だった。おかげでジャンケンが強くなった様に思える。



●昭和 36 年冬山 蝶ヶ岳サポート隊の 1 年生



●昭和 42 年日本海までのスキー山行 白馬岳北方稜線犬ヶ岳付近にて

・音楽家

自分の様な音痴は劣等感を感じたが、部員の中に楽器を操る輩が随分居た。楽器はピアノ、クラリネット、トランペット、ハーモニカ、横笛など。

・合唱

合宿が終り、バス停でバスを待つ時、音楽に長けた部員が他の者を指導して色々な山の歌を合唱した。一般の人々も暖かく聴いてくれた。

・カレールー

友人がバイトしている肉売り場で、豚脂を安く仕入れ下宿部屋で油脂を分離し、それに塩・うどん粉・純カレー・調味料を加え合宿用カレールーを作った。それ以来下宿部屋はカレー臭が抜けなかった。

・クッキー

当時合宿の昼食には松本で市販されていたみそパンを利用していたが、山に興味ある町のパン屋に頼んでクッキーを作ってもらった。レーズン、チーズ、青のり等色々な味を付けて貰いうまかった。

・ニンニク

先輩は皆ニンニクに偏見を持っていて用意したニンニクは全て捨てさせられた。そんな先輩が今や韓国企業の顧問で大のニンニクファンとは。

・戒名

冬山の沈黙中に戒名を付けようと言うことになった。

悪臭院紛々居士・骨相院未成熟居士……

・たばこ

縦走中にたばこが切れると夜中に遠くてもたばこを売っている山小屋まで出かけていた。

・スキー

部室に古い单板スキーが沢山あったので合宿で利用しようとしたが、エッジのないスキーを履いたこともないので、さんざん転び全て折れてしまった。

・食いバテ

合宿中は天気が悪いと食料の食い延ばしをしたり、手持ちの非常食も手を付けられず常に腹が減っていたが、いよいよ明日で里に下りるとなると丸一日下山を遅らせ残った食料をたらふく食った。食いバテの一日となった。

仙丈岳西面の思い出

昭和36年入部 農学部畜産学科 平 邦彦

- ・メンバー：牧（リーダー）、扇能、山田、山下、小出、山脇、高島、平計8名

牧がどこからか、三峰川源流は岩魚の宝庫との情報を仕入れてきました。

山ほどの岩魚を釣り上げる気持で一杯の牧が練上げた山行計画でした。

具体的には、夕食のおかずは岩魚、岩魚……岩魚。そしてチーム毎に岩魚を釣りながら仙丈岳西面の柳



●ビニールのテントも黄金の御殿

沢・兎台沢、岳沢、三軒岩小屋沢経由で仙丈岳頂上へ、というなんとなく風変わりなプランでした。

その話を聞いたみんなは、夕食代がただになる山行計画に興奮して一時騒然となりました。

しかしそのうちに興奮から冷めはじめ、誰からともなく用心深く賢いといわれている岩魚がおかずにする程そんな簡単に釣れるものだろうか、と言いつつ出かけたのをきっかけに、冷静になったみんなは「源流に生息する岩魚は人を警戒しないから大丈夫」という牧をなんとか説得して、岩魚メニューは一食のみに変更となりました。

さらにテントは持参せずに、現地で枝を支柱にしてビニールシートを被せた即席のビニールハウスで身軽な山行とのこと。多分、牧は畑のビニールハウスをみて“はっと”閃いたのだと思います。

牧は、この夕食代を自然の恵みで安く上げ、ビニールハウスのテントで、当時は滅多に人が入らない仙丈岳西面の沢登り計画を思いついた自分の頭のよさをさかんにアピールしていたことが記憶に残っています。

ということで、予定通り丸山を越え、三峰川本流に岳沢が合流したあたりでビニールハウスのベースキャンプを設営しました。

早速、岩魚探索と釣りに出かけました（ただし、釣り道具は一部のメンバーのみ）。なんと岳沢が本流と合流する深みに相当大きな岩魚の群れ……、群れ。よく見ると水量が極端に少ない本流にも魚影がちらほら。牧は「ほら俺の言ったとおりだろう」と満足げな表情を見せていました。

その晩は全員に数匹ずつとまではいかなかったが、とにかく岩魚メニューは実現しました。

沢登りの詳細は忘れましたが、2チームに分かれて沢を上り詰め、稜線から頂上→松峰尾根→本流→ベースキャンプのルートや、全員での行動等いろいろ組合わせた計画だったと記憶しています。

そのなかで、岳沢?、兎台沢? から頂上→松峰尾根→ベースキャンプへのルートをたどったチームが、夜の8時を過ぎても戻ってこず、これは間違いなく何かのアクシデントに見舞われたとしか思われな一大ハプニングがおきてしまいました。

今すぐ、同じルートをたどる捜索隊と逆をたどる捜索隊の2チームを編成して捜索に出るか、暗い中の行動での2重遭難を心配し、夜明けまで待つべきか、とずいぶん悩みました。

同時に、数年前の夏の劔岳合宿で三笠君が転落した時、リーダーとして適切な指示ができずに、同行した先輩達に助けってもらった辛い経験を思い出しました。

比較的危険が少ないと思われる本流→松峰尾根→頂上のルートだけへ捜索隊を出すべきかとも思いましたが、メンバーの疲労度を考慮し、最終判断は夜が明けてからの行動としました。

牧へアドバイスした自分の判断が正しかったか、あるいはもし、捜索開始を朝まで延ばしたために

……、とかいろいろな思いがよぎる中、「懐中電灯の光が見えるぞ」と誰かの声がしました。なんとか全員そろってほしいとの願いが叶い、思わず涙が出そうになったことを今でも思い出します。

晩飯を食べてもらいながらの状況報告で、沢の最初の滝を登攀中に誰かが滝壺に転落し、そこでかなりの時間を費やしてしまったが、当人に怪我はなく、ケロリとしていたので沢登を継続したとのこと。心配をかけて申しわけなかったとの言葉を聞き、みんなホッとして就寝しました。記憶に残る山行でした。



●松峰尾根からの仙丈岳西面



●左から 牧・扇能・平・山田・山下・小出・山脇

上高地小梨平サマーテントの思い出

昭和 36 年入部 文理学部社会科学科 松尾 武久

信大学士山岳会員にとって、毎年開設される「上高地サマーテント」は、青春時代の良き思い出となっている。穂高と梓川をバックにした小梨平のサマーテントを訪れた人々は、現在まで何名となっているのだろう。このテントで芽生えた恋で、生涯の伴侶を得た幸せな OB も数々居る。

山岳部に入部して苦しい合宿の続くなかで、このサマーテントの生活は一服の清涼剤であった。新人にとって、お客さんの世話をするうちに自然とテントワークが身に付き、それ以降の合宿では全く動きが違ってくるようになっていた。

悪名高き業者との数々のトラブルも毎年のようにあったが、それも梓川の清流と残雪の穂高の峰々、夜空の満天の星を見れば取るに足らない小事であった。

OB となって仕事で全国各地に散らばっても、海外に仕事で赴任して苦しいときにも、いつもいつもサマーテントの生活を懐かしく思い出したら頑張ってきたという人も多い。



●懐かしの三角錐テントの前で宿泊の方々と



●サマーテンに来てくれた恩師とクラスメートを囲んで

唐松の林の中での見知らぬ人達との交流の数々、夜空を見上げてのキャンプファイヤー、大声で歌った山の歌、そして先輩達との山談義、そして差し入れのビールの美味さ。どれを取ってみても、帰らぬ青春の1ページである。

後輩諸君！ 大変だとは思いますが、これからもサマーテントを続けて行って欲しいと切に思う。

OB 諸兄！ サマーテントを拠点に、六百山、霞沢岳、S字ルンゼに揃って行きましょう。

古い資料のなかに、41年度のサマーテント要領を見つけたので、それを読みながら想いを青春時代に馳せてみてください。

信州大学山岳会サマーテント

SAC Summer Tent Co.,Ltd.

I 目的

信州大学山岳会（SAC）員は、上高地小梨平にて、サマーテントを運営し、全国の青少年が山の自然を十分に味わってもらうために、最善の奉仕を行うものとする。

その目的は、全国の青少年との親善を図り、SAC会員のたゆまない努力と愛情により、サマーテント経営を万全なものにすることを目的とする。

II 日時

設営 7月10日（日）

開業 7月13日（水）

閉業 8月21日（日）

撤収 8月22日（月）

III 重役会から一寸ひとこと

7月の声を聞き、夏山プランにお忙しいことと思います。さて、我々サマーテント小委員会も遅ればせながら発足し、社長以下3名、大いに張り切っておりますので、社員の皆様ご協力をお願いいたします。宿泊者は遠地から大きな期待を持って訪れます。キーパーはその期待を裏切らないようご尽力ください。そして又楽しいキーパー生活となられるよう望んで止みません。なお、下記の取り決め心得をご了解のうえ、優良な当 Co.Ltd の社員となられることを期待します。

IV 取り決め

- ・キーパーは各自の日程を厳守し、各自日程一日前に入り、引継ぎをする。
- ・各キーパーは責任者を決め、その指示に従う。居候はキーパーの指示に従う。
- ・サマテンを準合宿と看做しますから、必ず上級者（経験者）の指示に従ってください。3年生以下は原則として4日キーパーをやってもらいます。4年生以上は自由ですが、お暇でしたら顔を出してください。（その他にも取り決めはあるが掲載省略）

V 心得

宿泊者の快適な生活を図るため、キーパーは次のことを行う。

諸施設ならびに金銭管理について

- ・諸施設または宿泊者の持ち物の管理に注意を払い、破損・紛失・盗難の起こらないように嚴重に注意すること。
- ・OBからの寄付金または山の道具は、OBの意思を尊重する。
- ・自炊準備の全然ない宿泊者は原則として40円（朝）、50円（昼）、60円（夜）をエッセン代として支払ってもらうこと。
- ・宿泊料
一般大人 150円（学生を含む）、信大生 130円、山岳部OB・他大学山岳部員 0円、山岳会員の身内の者 0円（ただし友人は原則として150円）
- ・薪・ガス等の乱用は禁止
- ・キャンプファイヤーは楽しいものになるようリードする。また遅くとも夜9時30分までに終わらせること。
- ・山行相談、ガイドについて
宿泊者から山行の相談を受けたら不確かなことを言ってはならない。
山への同行者をだすときは、キーパー責任者に許しを得る。
キーパーの山行については、一般的ルートは自由、パリエーションルートは各山岳部主将級の了承を得ること。
（その他にも取り決めはあるが掲載省略）



●これだけは今も昔も変わらないDNAか？

秋山強化合宿の思い出

昭和 37 年入部 工学部土木工学科 駒井 浩

時：昭和 37 年 10 月 30 日（火）～11 月 3 日（土）

メンバー：(CL) 寺田、(SL) 宮内、田中、山形、神野、宮崎、小川、中邨、西阪、駒井

行動記録

10 月 30 日（曇り）

6：00 松本発

9：00 小淵沢発

12：50～1：20 押手川

2：23 編笠山。景色がよい。

3：00 青年小屋

3：10 テント場

前日、2 日間の松本沈殿で意気消沈。列車内で食ったみかんうまかった。

小淵沢よりは自動車道。長くて飽きた。

10 月 31 日（曇り遅くに一時あられ）

6：05 出発

8：00 ツルネ新道分岐点。北アルプスをはじめ山々が美しい。

10：15～10：30 赤岳（昼食）

11：40 横岳頂上。霧氷やエビのしっぽが美しい。

12：50 硫黄岳頂上

1：30 夏沢峠

1：50 テント場。西阪、捻挫のため下山。我々は分かれて権現から赤岳へ。

雪の積もった中を進み、夏沢峠へ。霧氷と霜柱が素晴らしかった。晩、あられが降った。



●まだ笑顔が残っているから最初の段階



●霧ヶ峰高原にて

11月1日（晴れのち曇り）

6：05 出発

6：18 夏沢峠

7：15 天狗岳

8：30 黒百合平

9：05 にゅう分岐点

10：15 高見石小屋

11：15 麦草

11：55 大石峠

1：20～1：40 雨池峠（昼食）

2：30 三ツ岳

3：30 横岳

4：30 大獄

6：00 双児池テント場。雪は、3cm くらい積もっていた。苦しい行程を双児池まで。
着いたときは真っ暗だった。

11月2日（晴れ）

6：35 出発

7：15 大川原小屋

8：50 蓼科山

11：45 白樺湖 テント場とし、半沈。久しぶりに晴れた。嬉しいことに、白樺湖畔で半沈。
寝袋等も乾かすことができた。

11月3日（曇りのち雨）

6：10 出発

7：10 車山

以後、時計が故障し、記録がない。

最終日だが、天気予報は雨。曇り空を睨みながら出発。

霧が峰まではよかったが和田峠の頃からポツポツ。

ヘトヘトになりながら扉峠を越え、最後の登り茶臼山へ。

さらに美ヶ原から百曲りを下って三城牧場へ。

バスが見えたときは嬉しかった。

今日はとても人が多く全行程人だらけだった。内5～6割が女性。

今回の合宿は全員「苦しかった」という点で意見の一致を見たが、同時に「とても良かった」という点でも意見の一致を見た。

富士山、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山、中央アルプス、南アルプス等、雪をかぶって素晴らしい眺めだった。

昭和39（1964）年度を振り返って

サブリーダー 昭和37年入部 文理学部英文科 故 小川 勝

・部の問題

前年度に引き続き、分散山行主義でこの一年をやったわけだが、部員各自は分散山行の意義を深く認識し、進歩があったと思う。次に各問題点をあげたい。

①運営

部の運営は、総会、リーダー会という二つの決議機関を通してなされている。これはいつものとおりである。しかし、総じてリーダー会の意向に、全員が「あなた任せ」にしたという感じがする。この点は、リーダー会の構成人員を増やすことで、ある程度解決できると考えている。前年度までの問題点であった伊那・松本間の連絡ということは、宮崎の活躍などで解決できたようだが、まだ各係りの連絡ということになると、今一步の感をまぬがれない。

②合宿

合宿については、特に言いたいのは、やはり夏の定着合宿は必要であるということだ。雪上技術、岩登り技術のより徹底した修練のために、定着合宿は必要であるのではないか。その他は問題なかった。

③トレーニング

トレーニングについては、11月、冬山を前にして一応の申し合わせを行い、その必要性を認めた。だけど小生の考えでは、トレーニングは確かに必要であるが、過度のもの（いわゆる体力増強のため）でなく、各自の身体のコンドィションを整えることに重点を置いたほうが良い。トレーニングも部活動



●鈴鹿・御在所岳藤内壁を登った後で

の一つである以上サボってはならない。長期の過度のトレーニングは、山行意欲を減ずるのみであると思う。

④新人

今年は新人が少なかった。毎年、新人が減るということは重大な問題である。どこに欠陥があるのか真剣に考えなければならない。だけど、新人が少ないからといって温存をはかってはダメである。それは新人のためにも良くない。新人教育に大切なことは、山の上のことではなく山の下でのことであると思う。上級生は、新人が相談に来るのを待ってないで、積極的にこちらから出かけていって話し合わねばダメだ。こうした意見の交換、相手への理解が新人の山への理解を深め、そして彼は部から離れられなくなるのだ。

⑤サマーテント

夏テンはやるかやらないかでモメた。結局、今後も続けるというのが大勢のようだが、小生はその運営については、変革が必要であると考えている。来年度予算がとおれば、新しいテントは今の三倍くらいの大きさになる模様である。今までのやり方ではとてもダメだ。SACとして管理するのも一つの対案であると思う。

・SACの問題

去年からのSACは、一つの方向へ向かって歩み出したと思う。統合は先のこととして、遭難対策など、すぐにも出来る実利的なことを第一に進めていった方が良い。しかし、そのことだけでも地理的なハンディは大きく、連絡事務に当る者は大変である。他の部員の強力なバックアップが必要だ。小生個人の体験ではSACの用事であちこち行って、他の山岳部の人達と話し合ったりして非常に有益だったと思う。考え方の巾を持たず、意見を知るという目的だけでも、SAC会員相互の密接な交渉が望まれる。その意味で岳連加入も考えてよいのではないか。

・自分のこと

私は今年も落第してしまいました。やはりこれはいけないことだと思います。分かっているけどどうにもならないこの気持。学生はなんといっても学問が第一です。4年で卒業するのは当然でないかもしれないが、卒業したときには何かをつかんで卒業したいものです。(これ皮肉とちゃいまっせ)

山については、今年は大いに個人山行を追及したいと願ったのですが、夢と消えた方が多かったです。部の運営面での雑事に気をとられて、それが出来なかったのは残念至極。ですからあっさり言えばどうしたら良いリーダーとして山行できるかという問題について考えた一年でした。答えは“まだまだ修行がたりない。基礎が出来ていない”

ENDE

サブリーダーとしての反省

昭和37年入部 農学部林学科 宮崎敏孝

CLの要請でSLとして伊那側のリーダーを引き受けたが、そのときは何も具体的な任務、仕事などの考えも無く、ただボヤっとした感じを持っていただけであった。そしてリーダー会の一員としても年間計画を論議、検討することなくスタートしたことはいっとう反省すべきことであると思う。

この一年を振り返ってみて、表面上の支障は見られないが、部員各自それぞれの問題を残したのではないかとと思われるのである。ただ、2カ年の部生活の中では、よほど意識的、系統的に部の活動を組まなけ



●赤石岳山頂の檜の上で縦走隊メンバー

れば、リーダーが何であるか、どうすればいいのか、現在何が問題なのか等をつかむことは難しいと思う。昨年までの4年生の準OB化は山岳部の特殊性（経験の重要さ）を考えると、極力これを廃除していく心構えが必要であると思う。それは3年生があまりにも未熟であるという点に関して（この感じが僕個人のものであったならば、この点を一番反省したいと思う。）

後半期、小川君と乗鞍ゼミナールを計画していくうちに、それまで考え付かなかった登山観、山岳部観、リーダー観等が次々と湧き上がってきた。冬山、春山両合宿の計画の進行にともなう話し合いが多くなるにつれて、現在の我が部の姿が浮かび上がってきたのである。

それは、我が部の行動の基礎となるものが不明瞭であること。記録が残されないために、毎年同じ時点から出発すること。（これは各年度のCLの意向に大きく左右されることにも繋がる）部内の事務面がほとんど確立されていないこと、外部との接触が少なく“井の中の蛙”になりかかっていたので、部員の部活動への積極性を育てることが少なかったことなどが、主な問題として残されたと思う。

また、相次ぐ遭難の一方的な報道によってか（？）山へ行きたいが山岳部に入らない学生が多くなり、部員の入部が少なくなっていることは、我々の活動の中で解消する必要がある問題だと考えている。これに関しても、部の学生会へのアピール等も必要になってきたと思う。

以上の問題は、何も来年度のためのものでもなく、今年度の始めにも存在していたのでないかと思うと、前述したボヤーツとした感じだけでリーダーを引き受けたことの無責任さを反省せずにはおれないと思うのである。それはやはり3年後半よりの実際の行動より感じたものであるだけに、3年生リーダー（部のCL、SL）の物足りなさを禁じえない。しかし、今までの西郡、後藤、葛西各先輩は全く別ではないかと考える。

来年度への目標としては、前掲の問題のほか、SAC統合（強化）、海外遠征、報告No.2の発行など非常に多くのまた幅広い範囲に亘っているので、部員各自が自分の能力をフルに活用できる問題を引き受けて、部の仕事を責任分担で解決していく必要があると思う。それが実行されなければ、部の活動は前進がなくなるであろう。分担した仕事を通じて部を考え、感じていくうちにより充実した部が創り出されたいと思うのである。

今年度は、SLとしてCLを助けるようなことはなにも出来ないで終わってしまったことを、ここにお詫びして年間の反省にします。

記録係の反省

昭和 37 年入部 農学部畜産学科 西阪 孚

一年間の総会の議事録に目を通しながら、記録係としてまた個人として思うところをミックスして書きます。

まず、年度初めに「今年一年は分散形式をベースとして、冬、春だけは部で一丸となってやる」といった年度方針が打ち出された。このことに関しては、各部員の分散形式に対する理解も昨年度の経験も加えて深まり、相当数の個人山行がなされた。

僕自身も、昨年度までほども山行日数は多くなかったが、その山行の一つ一つは何れを振り返っても、真に充実した感じを得、楽しい一年間だったと思います。

しかし、後に書くつもりですが、分散形式をとる上において、一番根本の問題である部の基本線が明確でないため種々の問題があったことは否めないと思います。

第二に、報告 No.2 の発行の件ですが、委員会が持たれ年内発行を目指して仕事が始められましたが、原稿の集まりの悪さや、その他の理由で発行延期の憂き目をみたことは、報告委員の一員としても、真に残念であり、また申し訳なく思っていますが、来年度出来るだけ早く発行するつもりであります。

第三に、夏に長野の遭難を経験し、その結果 SAC 統合の考えが発芽し、SAC 委員の活発な活動が始まった。乗鞍で全部員の親睦会が持たれセミナー等も行われたが、小生の個人の意見としては、SAC はあくまで事務上の統合体であることを基本とし、特に遭難時に総ての面で潤滑に対処できる備えを有する機関であればと思います。

また、年に一度くらい 3 つの山岳部が集まって意見や研究または技術の交換をやり、親睦を深めることは上記遭難対策上にも非常に有効だと思います。しかし、合宿を同じく持つという考えは（個人山行は別として）よい傾向かも知れませんが、時間的にも精一杯である現状においては、否その他の面においてもマイナスの方が多すぎると思う。

統合された SAC は、あくまでも一つの山岳部では背負いきれない問題（遭難や海外登山）を処理する



●前穂高東壁を登り終えてホッとしたメンバー

機関でありたいと思っています。

第四に、先にも書いた部の基本線のことですが、一つの組織はその規模が大きくなればなるほど、その基盤がしっかりしていないと、崩壊の憂き目を見ることは歴史の諸事実からも明らかであるし、また崩壊とまでは行かなくても、運営・活動面で緒々の支障が起ってくる。たとえば現在の我が部では、分散形式をとっているが、技術面一つにしても、各自身をもって得た知識だけで行動しているため、各人各様で系統だったものではなく、下手をすれば個性をとおり越して分散になりかねない。また、部としての山に対する考えが一つあっても良いと思う。たとえそれに共鳴を感じない人も、その中で自分を何れに処理していくかを学び取るだけでも、その意義は大きいと思う。

このことについては、来年度に大いに意見がたたかわされると思いますが、今からそれを女房の出産を待つような気持（関係ないかー）で楽しみにと不安の入り混じった気持で待っています。

最後の記録係としては、お恥ずかしながら、何も出来ず申し訳ないですが、総会議事録だけはバッチリと用意してありますので、何卒ご利用ください。一年の反省なのかどうか分かりませんが、今思っていることを羅列いたしました。

注：37年度に伊那松本山岳部として発足した我が部も3年後に一応のまとまりが出てきたが、まだまだ、いろいろな問題を抱えていた。40年度の新しい幕開けの参考にしてもらいたく、リーダーはじめサブリーダーそれに各係、および2年部員、1年部員が反省文を書いた。この原稿が40年振りに陽の目をみたので、これをこの報告 No.2 のなかに歴史として掲載した。

山岳部時代の懐かしい思い出

昭和37年入部 文理学部英文科 中邨康文

6月半ば、街で山の映画の集いがあった。卒業以来ついで山の映画など見る機会もなかった。

昭和31年の記録映画とのことで、フィルムもスローで、むしろ好感が持てた。装備も着ているものも、往年の姿そのままに40年前に引き戻されたようだった。たしか2年の春、松尾氏と小川氏と小生で同じコースを辿った思い出が甦った。映画では、高瀬入りから千天の出会い、北鎌沢、独標、槍の穂と当時のテクニックもそのままに40分楽しませてくれた。

会場で、H氏（彼は社会人山岳会で活躍していた人。何かの機会で見識を得た）に出会った。氏とはやはり40年ぶりで懐かしく話が弾んだ。氏は以来、歳相応の山行を続け、現在は「山と自然に親しむ会」を主催しているとのこと。良かったら一緒にと誘ってくれた。

小生は、卒業以来山と山岳部から遠ざかっていた。それも不器用、能力不足のせいで、日々の生活に余裕が持てなかったに他ならない。ずいぶんと不義理したものだとあらためて思った。ただ、山岳部で得たもの…一番は「忍耐力」と思っているが…は社会人となってから、ずいぶん役に立ったと思っている。

今、目を閉じて思い返すといろいろな場面が次々と浮かんでくる。…A沢でのグリセードで失敗して転がったあと、寝袋に包まれているにもかかわらず、寒くて、寒くて、ずっと震えが止まらなかったこと。秋の裏銀座縦走のスタート、ブナ立尾根で完全にバテて、ほとんど無意識で烏帽子のテントに辿りついたこと。五竜のコルで真っ赤な夕日の中を、水を汲みに沢まで下っていったこと。光岳の下りで、草いきれの中で見た真っ白な山百合とその匂い。春山の行きか帰りか、細野の農家のお婆さんが出してくれた、ア



●北鎌平からの大槍 小槍



●北鎌沢の途中で 松尾・中邨

メ色の少しシャリシャリした野沢菜の口中に広がった美味さ。黒戸尾根の長くきつい登りと、遅い梅雨の長雨の中での沈殿。北沢峠へ長くて暑い河原の道。雪洞で焼いて食べた丸ごとのニンニクとその匂い。ラジュウスの青い炎とゴーと音を立てる様。大鍋での料理。冬の雨に打たれた後に、濡れたまま寝袋を乾かしたこと。バリバリに凍ったテントはしっかりたためず、ゴワゴワしたままパッキングしたこと。とうとうと流れる遠山川の流れが岩に当って、白く砕け散るさま。雪解けの斜面に群れ競って咲いている花々。ハイ松の匂いと青い空。しらべの樹林の中の苔の匂い……など等。総て瞬間の一場面、一場面が次から次へと浮かんでくる。尽きることのない山岳部時代の懐かしい思い出である。

報告 No.2 にかけた思い

昭和 41 年入部 教育学部 岡村 知彦

報告 No.2 の件。自分たちの来し方を振り返り確かめたくなる……。お互いそんな歳になりましたね。あの時、もう少し悪役に徹しておれば、今このような迷惑を諸兄にかけないで済んだのにと悔やんでおります。41 年度の新谷リーダーのもとで記録係をしたおり、ボロプレハブ部室の戸棚に山積みされていた 35 年度以降の計画・報告書類を、年次毎にファイルに綴じて整理した覚えがあります。報告 No.2 計画のおりに、その存在を確かめましたので、部室のどこかに紛れ込んでいるはずですが、今頃あると期待するのが間違いの元というものです。

たしか 5 年生の秋の頃、新谷と痛飲したおり、長野山岳部の「温もり」のように、松本部室にも日頃の山に対する思いや、人生観から恋愛観にいたるまで、気儘に書き付けられるノートを置こうということになりました。新谷が大学ノートの表紙に悪筆で「雑感」と書いたのを見て、「ありきたりの題すぎる」と

イチャモンをつけ、間の開いた雑と感の間に「人雑」の二字を更なる悪筆で付け加えて「雑人雑感」と題し「雑人会」の存在を後に残そうとしたことなど、中田兄の原稿を見て思い出したりしました。

落ちこぼれて拾い上げてもらった伊那松本山岳部の衆への、せめての恩返しにと、報告 No.2 の作成に取り組んではみたものの見事な挫折。山哲先生の玉稿（読み返してみると、先生が山岳部に対する思いを激務の中で書き綴り残して下さった唯一ともいえる貴重な原稿で、鋭く観察された考察が、先生の人柄を彷彿とさせ、山岳部のみならず山哲一家の諸氏にも是非読んでもらいたいと思います）や小松先生はじめ諸先輩がたの貴重な原稿を生かしもせず、30年の月日が過ぎてしまいました。

無沙汰のせめてもの罪滅ぼしにも、報告 No.2 発行を退職してからの課題の一つにせねばと思っておりましたおりに、報告発刊に向けての動きありという便り。若い衆がやってくださるならこれにこしたことはありません。これでようやく喉にささった骨が取れそうです。当時、私が頓挫するなどとは思いません、私を信じて諸氏が寄せてくださった諸資料、言えた柄ではありませんが有効にお使いください。僅かしかありませんが、個人ファイルからも45年度以前の書類を取り出して送ります。

注：ずっと以前に報告 No.2 の発刊をせねばとの責任感から、OB 岡村知彦が膨大な資料収集と整理をしてくれたことがあった。その後、諸事情により報告の発刊は延期となったが、その整理があったため今回の発刊が出来たという過言ではない。当時の彼の思いがどんなものであったか、小川勝への書簡（02年10月26日付）の一部を掲載した。

あの夏の思い出

昭和41年入部 農学部畜産学科 武藤一郎

4年生の夏合宿を終えた昭和44年8月下旬、長い夏の山行でヨレヨレになった特大キスリングに個人装備を詰めて、富山駅から地方鉄道に乗り立山山麓にある真新しい文部省（当時）立山登山研修所の前に降り立った。全国大学山岳部リーダー研修会に参加するためである。当時は儉約は美德だった。登山靴はビブラム底がチビルからと下界では努めて履かずザックに入れて、つぎはぎの当たったズボンを誇らしげに履いて、部外者から見ればさぞかし滑稽な「山こじき」でしかないような格好で、さぞかし「俺は山屋だ、信大山岳部だ！」と仲間内でしか通用しない気負いと意気揚を漲らせていたことと思う。各地から集まる大学山岳部の面々に会うにあたり、「やっぱし、我が信大山岳部の名に恥じない行動をとらねばならないズラね。」と、それでも結構それなりに真剣だったと思う。

全国からの参加ということで数十校を予想していたら、確か十数名程度と意外と少ない参加だった。そりゃそうだろう、8月下旬といえば長い夏合宿の後である。正直、自分も長い合宿の山行後にまた信州から富山まで足を伸ばすのはズクなしの身には億劫だったが、金沢には1年生だった頃に八年生だった出島五郎先輩がいるではないか。こりゃいい機会だ、少し大回りだが名古屋に帰省する途中に立ち寄りをと、不純な動機に釣られて参加した。とはいえ、狭い部活の世界から外を見るのは、なんにせよ良い機会ではあった。

研修は講義と実習で、驚くなかれ冒頭は、あの高名な今西錦司先生の講義だった。確か山の植生と氷雪の関係について話された。日本の学術探検の大御所、自然界や人類を自由闊達に捉えた研究の草分け的存在である今西先生の警咳に触れることが出来るとは、この研修会も少しはいいところがあるじゃんかと

思ったものだ。研修中は世話係が数名いて講義と実習の引率役を担当していた。この人達は、だいたいが大学院の助手クラスなのだろう。こっちの勝手な想像だが、きっとこういう人達が南極観測隊や学術調査隊の機会を狙っているのだろう。

実習は主として幕営とザイル・ワークを含む雪上訓練。両方とも技術的には特段のものでなく、そつなくこなしたつもりである。同じ班に弘前大学と芝浦工大がいて、それぞれタイプはまったく異なるが両方とも好感を持てた。作家の柴田錬三郎が生前言った。「戦地では人間は中身をさらけ出す。概して東北人は朴訥で誠実、不言実行タイプだった」と、この弘前大がまさにそれにピッタリの東北人。エッセンをやると水汲みから食器洗いまで黙々と自発的にやる。こちらも信大山岳部で育った身としては不言実行は部の教えでもあるが、悲しきかなズクなしの性格ゆえについ先を越されてしまう。尊敬に値する奴だったね、まったく。

他方の芝浦工大は、服装から雰囲気まで洗練されていて、いかにも都会タイプだが性格の良さでいやみが無い。エッセンのときに、プリムスのストーブが詰まり掃除する針金を探していたら、彼らはこれを「ゴケゴロシ」と呼ぶと教えてくれた。夏合宿から研修と男ばかりの生活の中で、成熟した女性の人間らしさを感じさせる、なんと味わい深い呼び名を付けるものであろうかと妙なことに感じ入ってしまった。

数日間の研修が終わり金沢で五郎さんのところにお世話になった。家業の造園業を休み能登半島周遊のドライブに連れて行ってもらった。いまでもその時の写真を持っています。夏の終わりで閑散とした浜辺でパクついた貝の磯焼きはうまかったです。五郎先輩ありがとうございました。(了)

思い出のアンナプルナⅡ峰南壁

昭和45年入部 人文学部文学科 三井和夫

夏には便りを頂きながら、どうしても書けずに今に至ってしまいました。

報告に写真をとということで小川勝さんから連絡があり、冬は比較的余裕もあり、奥のほうからフィルムを出して遠征のときのフィルムを見てみました。ニルギリ・サウスを全体として撮っていないようでした。アンナプルナⅡ峰は上部ではカラーでなく白黒でした。

僕にとってアンナプルナⅡ峰は遠征から離れるきっかけの山でした。

BCで数百年の樹齢の石楠花の大木を伐って、ネパールのスタッフの焚き火になってしまったこと。ABCや南壁基部に運び上げたロープ、資材を残してきたことは残念なことでした。翌年に第二登した大阪の戸谷氏に会う機会があり、ABCの荷物が無かったと聞いて、少しホッとしました。初登攀のオーストリアのマッカートニスレイブ氏が片付けたのかも知れません。

TBCから上は、4人のメンバーのみで荷揚げに明け暮れ、疲れ果ててしまいました。先輩の佐藤正敏さんに守られていたような山行でした。

僕にとっては、山と一体となった初めての経験もし、体中から命の喜びが湧き溢れてくる感動にも包まれ、かつてない素晴らしい山でした。

いつまでたっても頂上岩壁の姿は変わらず、その大きさに抱かれているのも最高でした。



● ABC より雪洞を経て最終キャンプ地に向けて



● フィックスを荷揚げして、最終キャンプへ戻る師田隊員 後方は吉田隊員。

山岳会の思い出

昭和 45 年入部 農学部森林工学科 高橋 雄 治

私の山の履歴は高校に始まる。高校のワンゲルに所属し、休みには中国地方や四国の山に登った。高校の進路指導で進む道は信大山岳部と確信を持って言った。担任にあきれられたがその通りの道になった。高校の時に見たガストンレビューファの「天と地の間に」の映画は強烈な憧れだった。

信大の山岳会に入り、高校とは別な厳しさがあったが、山行は自由だった。思い出せば多くの思い出がある。新人の冬山の事、当時の会は部員が 20 人以上いた。新人合宿では 5 パーティ 40 人位と記憶している。同期の会員は、卒業（平均 6 年）まで 8 人残った。異常とも言え、その後もこの数は超えてないだろう。

冬山は、ネパールアンナプルナ II 峰の計画が具体化していて、直前の合宿でもあり活気があった。合宿のリーダーは佐藤正敏さんで、計画は新人が焼岳と西穂岳の登頂であり、上級生は奥穂から前穂の縦走であった。私はその時両手のかなり重い凍傷になった。軍手のままで緊張して西穂の稜線を歩いていた。冬山を知らず、上級生から特にミトンの着用など指示もされず、自分だけ手が凍ったのは不思議な気がした。特に凍った感じはなく、最初痛いような冷たさでいつのまにかその冷たさも余り感じなくなり、必死で歩いたように記憶している。堅くて自分の手とは感じないようになった両手をテントで鍋の中に入れて溶かした。次の日くらいから両手の指全体に水泡が出来、グローブのような手になった。ミトンしか着用出来ないで下山し、大学の病院で診断を受けたが、こんな本格的な凍傷は初めてと医者は言い、裏で参考書を見ていた。教養部の保健室では優しい保健婦が手縫いのミトンを作ってくれた。その後、両手全部の皮がずるっとむけ、つめが全部取れた。35 年が経ち今は特に問題ないが、小指は少し曲がったままである。

リーダーの佐藤さんは、その後凍傷に目が行き届いていなかった事を反省していたらしい。佐藤さんは、

大きくて汚くてボロと呼ばれていたが惜しくもアンナプルナで遭難死した。

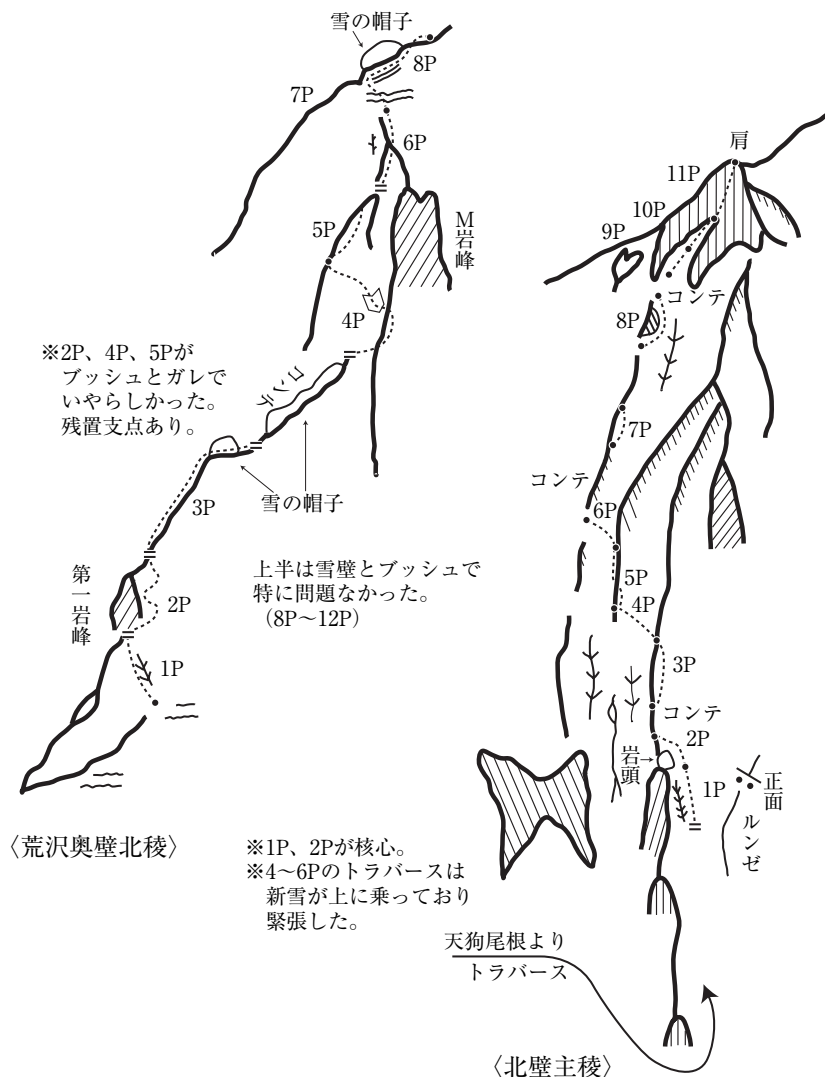
次の年に冬の八ヶ岳の壁を登りに行ったが、自分の手が冷たくて思うようにならないこと、しかも仲間とはその程度に大きな差があることが分った。手の血管が少ないとか血の巡りの悪さとか特別の体質であることを痛感した。最早ヒマラヤの高山は夢だけと思った。

それ以来安曇野市に住み着き、細く長く山登りを続けている。沢登りと山スキー、山菜取り、きのこ採りで山が多い。今年も新しい山、乙妻山北面や爺ヶ岳南面を滑った。体は重いが何とか山登りを続けられる事を感謝している。

さらに最近、爺ヶ岳、針ノ木岳を正面に見る山を購入し、新しい楽しみが広がった。これも、今までの山遍歴の延長と考えている。

残雪期鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁北稜、北壁主稜連続登攀の記録

昭和46年入部 人文学部文学科 吉田秀樹



とき：昭和 52（1977）年 4 月 28 日～5 月 1 日

参加メンバー：L 吉田秀樹 師田信人 片山博彦

行動記録：

4 月 28 日 松本～大町～鹿島～荒沢～荒沢尾根末端

後半から強い風。明日晴れば順調に登れると思い雨の中出発。荒沢は出合より少し先で簡単な高巻きをし、後は雪の詰まった沢どうしに行く。天狗尾根はブッシュ。殆どブロックも落ちてこない。雨も止まないで荒沢尾根末端付近でツェルトを張る。びっしりと濡れる。

29 日 天気は思わしくないが出発。M 岩峰を左に捲く 2 ピッチが非常にいやらしかった。此処までは余り雪がついていないが、ここより堅い雪が現れる。また雨も降り出す。12 ピッチ、7 時間 35 分で小舎岩へ出る。風雪でも、ここにツェルトを張る。（オーダー L 師田－吉田－片山）

30 日 昨日まで我慢した甲斐があり、北壁をドッ晴れの日に登ることができる。取り付までトラバースルートをとったが、昨日降った雪が堅雪の上に乗っており非常にいやらしく時間がかかった。11 ピッチ、6 時間 35 分。雪は堅く 12 本爪が良く効いた。ドッ晴れ、それでもヤッケを着ているのに休むと寒いくらいである。ブロックは一つも落ちてこなかった。中央ルンゼ側壁が迫力があった。天狗尾根を下降する予定だったが、予想以上に雪がなく面白くなさそうなので、東尾根を一気に下る。

暗くなる前に西俣出合いに着いた。今年はかなり雪が多い。

（オーダー L 吉田－師田－片山）

1 日 陽を一杯浴びてのんびりと下山。

昭和 52 年春山個人山行（積雪期黒部源流）

昭和 49 年入部 医学部 師田 信人

「黒部」という言葉に独特の魅力を感じるようになったのは山岳部に入ってほどない頃だと思う。上ノ廊下を廻行し、源流を幾たびか訪れるうちにいつか積雪期黒部源流に行きたいと思うようになった。昭和 51（1976）年 3 月の春山個人山行で、初めて冬の黒部源流に降り立った。この時は神岡新道から入山し、薬師沢を下降して祖父平より水晶岳をアタックした後、薬師岳に登る予定であった。しかし、悪天候のため祖父平の雪洞で 4 日間頑張っただけで下山せざるを得なかった。このとき初めて雪の赤木平を見た。北ノ俣岳の主稜線から見下ろす赤木平は一面の大雪原だった。北アルプルの真只中に存在する大雪原を目にして、赤木平を舞台にスキーを駆使して冬の黒部源流へ下降したい、という思いを初めて抱いた。その偵察も兼ねて昭和 52（1977）年夏の個人山行では穴毛谷から金木戸川経由北アルプス主稜線に出て、赤木岳より赤木沢を下降、祖父沢を廻行して雲ノ平に至った。以上の経緯を経て、昭和 52（1977）年春山個人山行は赤木平経由黒部源流を目指し、水晶岳から東沢をスキー滑降し、氷結した黒部湖を渡る計画を立てた。源流を目指すという山行の性格上、スキー操作に習熟している中嶋岳志（SNUAC:長野上田山岳部）と 2 人でパーティーを組んだ。

行動記録 昭和 52 (1977) 年 3 月 15 日 - 22 日

15 日 夕方松本から富山に向かい、富山駅宿泊。

16 日 打俣 8:00 - 打俣乗越 11:10 - 寺地山 13:40 ビバーク

富山から神岡へ出て、タクシーで打俣部落まで行く。そこから登り始め、打俣乗越を経て寺地山ピーク脇に雪洞を掘る。

17 - 18 日 視界悪く沈殿

19 日 雪洞発 8:30 - 主稜線 11:50 - 赤木沢出合でビバーク

朝方はガスが濃く、本日も沈殿と思い崩壊しかけていた雪洞を諦め、隣に新たに雪洞を作る。ほぼ完成した時点でガスが切れだしたため急遽出発となる。昼前に主稜線に出て、北ノ俣岳から東へ派生する尾根にルートを取り赤木平へ下降する。下降は斜滑降・キックターンの連続で、かっこつけて回転しようとするとうずついた雪で転倒し体力消耗するだけだった。最後は急峻な尾根をスキーを担いで赤木沢出合付近に下降し、夏場の滝らしき場所の横に雪洞を掘る。正面に水晶を見据えてビバーク。

20 日 雪洞発 6:15 - 祖父平 8:40 - 祖父岳 12:30 - 水晶小屋 14:45

出発時は雪が締まっており、アイゼンを着けスキーを担いで赤木沢を越えウマ沢をトラバースする。樹林帯でスキー装着し、黒部源流に降り立つ。昨年春より雪が多く、動物の足跡がついているしっかりしたスノーブリッジを伝って進む。祖父平から祖父岳への登りは雪質が悪く、スキーを履いたり引きずったり苦勞する。樹林帯を抜けると真っ白な祖父岳がパタゴニアのアレナーレス山脈のように実にかっこいい。距離感がなく祖父岳まで思ったより時間がかかったが、それでも予定より早い昼過ぎに到着したので計画を前倒しにしてその日のうちに水晶小屋にもぐり込む。

21 日 水晶小屋 7:15 - 水晶岳 7:50 - 東沢本流 9:15 - 東沢出合 13:05 - 平ノ小屋 16:00

快晴で冷え込み、出遅れて小屋を出発。前日、中嶋と東沢下降路を検討し、当初の予定であった東沢乗越より五郎池経由の下降はやめて、上部は急だが下部は問題なさそうな水晶岳北側より東面に広がるカールを下降路に選んだ。水晶岳からは、足許にこれから滑降していく東沢と彼方に氷結した黒部湖が望めた。ピークから温泉沢ノ頭を目指し、手前のコルよりカールへ下降する。上部の急斜面は雪崩ないように祈るような気持ちで駆け下る。安全圏に逃げ切ったところでスキーを履き、水晶岳東面の岩塊を見上げながらすり鉢状のカール底を豪快なスラロームで滑る。東沢



●水晶岳東沢源流のカールを滑る中嶋



●氷結した黒部湖上を黒 4 ダム目指してスキーで行く師田

本流出合で大休止し、10時から東沢下降開始。スノーブリッジを左右に渡り、樹間をくぐり抜け大きなスラロームのシュプールを雪面に描きながら飛ばす。あっという間に東沢の3分の1位を下降したが、笑っていられたのはそこまでだった。スノーブリッジがなくなり、徒渉・高巻き・ヘツリを繰り返しやっとの思いで東沢出合に着く。そこから平ノ渡しに向かう夏の高巻き道に入るが雪壁化しており、消耗が激しいので放棄して黒部川岸に降り立つ。観念して、水の減っている黒部川をアイゼンを着けてじゃぶじゃぶ渡る。アイゼンのおかげで徒渉中も足が滑らない。なんでこんなことをと思ううちに、靴の中で足が泳ぎだし腹も据わってくる。黒部湖底の雪原を佝びしく西陽を浴びて歩き、針ノ木谷出合の地形となったところで、水位の下がった黒部湖底から思わぬ位置に平ノ小屋を見つける。3度目の徒渉をして湖から小屋への雪壁を登る。

22日 平ノ小屋で一日靴を乾かしながら沈澱。

23日 平ノ小屋9:00 - ダムサイト10:30 - 黒部ダム11:00

朝は余裕を持って小屋を後にする。朝方降った雪でスキーの滑りは悪い。黒部湖は氷結しているものの所々氷の薄いところがあり無気味だった。2人つるんで湖底に沈む気はないので、ザイルなしで間隔をあけてダムへ向かう。ダムサイトからダムの堰堤上までは、水位の下がった黒部湖が雪壁化し崩れそうなブロックが引っかかっている。仕方なく、土壇場でザイル出して50mほど登りダムに着く。関電トンネル内に入り、半分ほど歩き閉口してきたところで工事事務所の車に拾われ扇沢へ。更にそこから工事用トラックに便乗させてもらい大町から松本に帰った。

(以上の記録は「岳人」に投稿した原稿をもとに、書き直した。)

個人的には、この山行をもとに昭和52(1977)年5月には水晶岳東面リッジの登攀を行い、さらに冬山合宿での厳冬期黒部横断に継続していくものとなった。困難度だけなら更に上に行く登攀を幾度と経験しているが、黒部という地域性・源流を目指すという発想、山行の独創性という点で忘れ難い学生時代の思い出の一つであり、密かな誇りを持って今も心に生きている。

伊那松本山岳部時代の思い出

昭和51年入部(54年度リーダー) 農学部林学科 田中誠司

○穂高の新人合宿で受けた洗礼は強烈だった。

馬鹿でかいキスリングは、肩に食い込み両手がグローブのように腫れ上がる。新品のピッケルはテントの側溝掘りが初仕事。エッセン当番は2時半起床。朝焼けで明るくなった涸沢をキックステップで駆け上がる。こんな辛い想いを癒してくれたのは3度の食事と穂高の山々と仲間達。行動食で好評だったのは「くずケーキ」とシトロンソーダの素などの粉末ジュース。夕食では先輩から代々直伝の山菜の天ぷら。残雪の景色が素晴らしい涸沢や奥又に加えて気分爽快にしてくれたのは、3・4のゴルからのグリセードと尻セード。こんな楽しいスポーツはないとまで雪と岩の世界に感激した。これが私の登山の原点になった。

○冬山で重荷を背負って縦走できることを目指した。

入部して以来、4年生までのリーダー会の諸兄だけでなく5年から8年生までの経験豊かな先輩にも恵ま

れ、あれよあれよという間に登山技術が身に付いた。冬山合宿だけでも、昭和 51 年に SIMAC で奥大日尾根から剣岳・立山、昭和 52 年に SAC で北仙人尾根から剣岳（遠見尾根・早月尾根の横断隊も）、昭和 53 年に SIMAC で笠ヶ岳から槍、昭和 54 年に SAC で杓子尾根から白馬・親不知。いずれも所期の目的を成し遂げることができた。厳しかったけど、厳しければ厳しいほど印象に残る、そして楽しい山行だった。

○ニルギリ南峰登頂

昭和 53 年（1978 年）10 月 10 日、ネパールヒマラヤ中部のニルギリ南峰に OB・現役の 6 名が揃って初登頂できた。同じ年の春、ネパールヒマラヤ西部のナンパ東南峰（ジェティ・バフラニ峰）に初登頂した OB の三井さん、現役の吉田、師田さんの 3 人に OB の藤松さんと現役の私と加藤がネパールで合流した。ジョムソン街道やミリスティー・コーラのキャラバンは新鮮な気分、地下足袋に重荷を背負う歩荷（ぼっか）の役目も果たした。BC 以降はシェルパもいない若いメンバーで挑んだ。日本の冬山合宿の延長にあったように記憶している。ポイントはアイスフォールを抜けきることだった。登山の 1 ヶ月、雪と岩の世界は迫力満点だったけれども、日本の緑の山が懐かしく、そして美しく思えてならなかった。

○知床半島

個人山行でユニークだったのは、2 度の知床行き。1 度目は昭和 52 年 3 月終わりに藤元さんら先輩 3 人と半島を羅臼岳から岬までスキーで縦走したこと。3 月 31 日夜、知床台地でオホーツク低気圧の暴風に襲われエスパーテントが壊されないよう 4 人が人柱で支え続けた。前の日には（クラウン峰に逝った）二俣さんと下田さんがルシャ川源流の雪原で楽しくキャンディーズを歌っていたのを今も思い出す。2 度目は、昭和 54 年 2 月に島谷ら後輩 3 人と半島を宇登呂から建根別まで一周したこと。ルシャ川河口の先から接岸している流水に乗って海伝いに岬の手前までスキーで行けた。これがセラック帯などと、押し上げられた氷山に見とれていて、ニルギリで苦勞するとは思っても寄らなかった。雪の知床はオジロワシやヒグマなど大型野生鳥獣が近くで見ることができる別天地だった。

「信大伊那松本山岳部」と「乗鞍ヒュッテ」

元信大乗鞍ヒュッテ・乗鞍管理人 岡崎 猛、三和子

山好きな私が雄大な乗鞍岳の魅力にとりつかれ、鈴蘭小屋、位ヶ原山荘、肩の小屋等のバイトをして 3 年、



●最初の乗鞍ヒュッテ 昭和 38 年 12 月

どうしても山麓に住みたいという夢……それが「信大乘鞍ヒュッテ」の小屋番という形で実現した。

昭和 38 (1963) 年 11 月、信大乘鞍ヒュッテ完成の祝賀会が学生部主催で行われ、その席上で小屋番として紹介され、当時の委員長・西郡光昭氏との因縁の出会いとなりました。当日、松尾武久氏、宇都宮昭義氏、今は故人となった牧晃一氏らも参加。翌日、彼等は乗鞍岳へ登られたように記憶しております。その年の暮れから正月にかけて西郡氏が一人で来訪され、私の小屋番としての門出と新年を祝いました。これが酒友?としての第一歩です。

当時のヒュッテは完成したといっても、一階のカイコ棚だけで二階は未完成。翌年、カイコ棚の一部を改造し、押入れと 3 畳の管理人室が出来たのです。また、二階は両窓側にタタミを 10 枚ずつ並べ、真ん中に薪ストーブを置いただけのものでした。当然、現在のようなサッシではなく、窓や隙間から風や雪が吹き込むという状態でした。

昭和 40 (1965) 年、国道 158 号線上に東京電力梓川発電所のダム工事が始まった。同年 6 月、京都から嫁サンが来た! ささやかな披露の会は、近くの文部省共済組合「あづみ荘」。西郡氏の音頭で山岳部員がウェイター役で応援してくれた。当日、島々駅まで来て土砂崩れのため、鈴蘭まで来ることが出来なかった松尾氏らにお詫びしたい。タイミング悪くてゴメンナサイ!

当時テレビはなく、ご飯、風呂、暖房は全て薪。水道は川の水をポンプで汲み上げ、ガスはプロパンという生活だったが、夜は薪ストーブを囲んで酒を飲んで談笑し、歌を唄ったものでした。

♪薪割り、メシ炊き、小屋掃除——皆なでみんなでやったっけ!——♪

ある年の冬、先述の水を汲み上げるポンプが凍結し、一滴の水も出ない事態となった。雪を溶かして大きなカメに溜め込むという作業に、山岳部員が率先して労力を惜しまずやってくれた時、心から感謝の気持ちで一杯でした。

ありがたや! ありがたや!

やがて国道にダムが完成し、舗装道路となった。ヒュッテには乾燥室が増築され、暖房や風呂の燃料は灯油に変わり、ガス炊飯器やテレビも設置。水道は村営(旧安曇村)簡易水道が引かれることとなった。ヤレヤレ!

折からのスキーブームで学生達の利用が増えたが、建物の老朽化が目立つようになり、本部へ幾度となく陳情した結果、昭和 55 (1980) 年 10 月ヒュッテの裏側にて新築工事が始まった。鉄筋コンクリートで温泉付。翌年 4 月に完成し名称も「信州大学合宿研修施設・乗鞍寮」と変わった。同年 5 月寝具や厨房器具



等を新しい寮へ移動。6月1日いよいよヒュッテを取り壊す日がやって来た。

顧みれば17年6ヶ月、愛したヒュッテの取り壊し場面を見たくない！——と「位ヶ原山荘」まで出かけ、管理人不在の解体作業となった。僅か一日での幕切れであった。

新しい寮となって、徐々に学生気質も変ってきた。学生との年齢差もあるが、以前のように輪になって話すことも飲むことも、そして歌うことも少なくなった。

昭和63年、昔の仲間が集える場として、自宅を増改築しては？ という声を聞いた。それには資金不足だったが、山岳部OB諸氏のご厚意で資金カンパをして頂いた。おかげ様で、平成元年（1989年）10月民宿「ふれんず岡崎」を無事開業することが出来たのである。感謝感激！

月日は流れ、平成7（1995）年4月定年退職することとなった。奇しくも、同年5月小川勝氏が「信大応援団ネパールトレッキング」を企画。「GWの部」に参加させて頂いた。60歳にして初めて見るヒマラヤの山々に、心ウキウキと足取りも軽く？ 生涯忘れることが出来ない記念となった。

退職後はささやかな民宿で、時折訪れてくれるOB諸氏との昔話に花を咲かせているが、ここ数年はスキー客や観光客が減少し、開業時に受けたご厚意のお返しが未だ出来ず、心苦しく思う昨今でもあります。

今回、報告編集にあたり、“ぜひ一筆を”と依頼されたが、何しろ40数年前の記憶は「おぼろげ」で「定か」ではなく、老体に鞭打ちながら古いアルバムを引っ張り出して記してみた。

最後に、昭和38年から今日まで山岳部OB諸氏から賜ったご厚意や、多大なるご支援を忘れることなく、また有難く感謝しつつ残された人生を二人三脚で歩んで行きたいと思う次第です。今後ともよろしくご厚誼の程を伏してお願い申し上げます。（最敬礼！）

信大学士山岳会は素晴らしい！“Berg Heil！”



●岡崎夫妻と山岳部の面々片岡格さんの顔も見える